The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	朝鮮における植民地金融史の研究
Author(s)	高嶋, 雅明
Citation	大阪大学, 1980, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32855
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏名・(本籍)	高嶋雅明（たかしままさあき）
学位の種類	経済学博士
学位記番号	第 5097 号
学位授与の日付	昭和55年10月4日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**朝鮮における植民地金融史の研究**
論文審査委員	(主査) 教授 作道 洋太郎 (副査) 教授 原田 敏丸 助教授 宮本 又郎

論文内容の要旨

本論文の課題は，朝鮮における植民地の通貨・金融機構の構築過程と，貿易商業金融・植民地金融の展開過程を分析することによって，ひとつは日本資本主義の形成・発展期の金融構造に占める特殊金融機関の役割，さらには対外金融構造の特徴を明らかにし，いまひとつは朝鮮における植民地金融展開の歴史的特質を考察することにある。また，かくのごとき課題を分析する視角としてつぎのような枠組を設定した。ひとつは日本資本主義の発展のいかなる歴史的条件が特徴的な対外金融構造を構築するにいたったかという，いわば国内的発展条件の検討をなすことであり，ふたつには日露戦争を経て，はじめてわが国の植民圏に金円・日銀券を中軸とする小宇宙的な通貨圏を設定することができたことから知られるように，日本資本主義をとりまく国際的条件の検討であり，最後には金融過程の植民地化に対抗した朝鮮国内での自立した金融構造の構築過程の展開の跡づけを，いわば朝鮮経済史の展開にそくして明らかにし，日本資本主義の半植民地的，植民地的支配の展開に対する朝鮮側の対抗と従属の諸関係を具体的に検討することである。ただ，第三の視角については本論文においては，問題の指摘にとどまっており十分には展開されていない。

本論文はかくのごとき課題への接近を，朝鮮における植民地通貨制度や金融機構の構築過程と，それを前提とした初期の植民地金融の特色を明らかにしようとした前編「朝鮮における植民地金融の構造」と，日本資本主義と朝鮮経済との関連を，日朝貿易の段階的特質を明らかにし，さらに，それを金融過程から支えた日本金融機関の役割と貿易金融の特色を析出した後編「朝鮮における貿易商業金融の展開」から構成されている。

まず，前編第一章では，日本通貨の自由流通といった条件を極東における国際金融構造の特色と，

日本の役割の変遷を通して明らかにし，さらに，朝鮮における通貨発行の特権や鉄道敷設権の獲得をめぐる帝国主義諸国間の借款競争と日本の役割，また日本の資本輸出の特徴について分析している。第二章では第一銀行券が植民地通貨として形成される過程と朝鮮国内における諸通貨流通の諸条件と現状を分析し，貿易商業金融に介在した第一銀行券流通の困難な事情を明らかにし，朝鮮国内の自立した通貨と金融構造の存在を示している。第三章では，第一銀行朝鮮支店を主軸とする植民地金融機構の構築過程を分析した。すなわち，第一銀行券はそれのもつ信用力だけでは十分な流通力を発揮できず，植民地化政策の一環として実施された財政整理や貨幣整理事業の進展による金融機構の構築を通して，はじめて朝鮮の国内通貨たることが可能となった事情を示し，それは形成途上にあった朝鮮の自立した金融構造の編成替えと歪曲をもたらす過程でもあったことを分析した。また，どのような植民地金融機構を構築すべきかという政策論争や，植民地金融機関にさしあたりどんな役割を課すべきかといった論争を，諸利害関係者の論拠を紹介しながら提示し，それらがやがて朝鮮銀行へ集約されていった過程を明らかにしている。第四章では植民地金融の具体的な展開を，第一銀行，韓国（朝鮮）銀行の内部資料を利用して明らかにし，植民地金融が植民地支配機構を形成するための対政府（総督府）への財政援助と,「綿米交換体制」を支える金融的役割を担うものであったことを示した。かくて，日本の朝鮮に対する金融的進出は1902年の第一銀行券発行と1905年の第一銀行券法認を画期として三期に区分され，それぞれ貿易商業金融から借款供与・資本輸出さらには植民地開発を目ざした「勧業・拓殖」金融へと段階的に変化したと結論づけられる。

後編では貿易商業金融の先行が日本による朝鮮に対する植民地支配の前提をなしたという事情を踏まえて，朝鮮における貿易商業金融を主軸としてきた第十八国立銀行→十八銀行を主たる分析対象として，日朝貿易・居留地商人・貿易商業金融・日本金融機関の段階的変容を考察している。すなわち，日朝貿易は日本資本主義の発展とも関連して，海関設置・日清戦争・日露戦争を画期として段階的に展開し，それに対応して居留地商人の存在形態も単なる雑貨商的存在から綿製品や米穀を取扱う専門的貿易商，さらには朝鮮国内で諸事業を興したり土地集積をなす植民地地主へ変容していったが，日本金融機関は，その過程で，単なる貿易商業金融の担い手から「拓殖・勧業」金融＝産業金融の担い手へと変容していったことを明らかにしている。

論文の審査結果の要旨

本論文は，朝鮮における植民地金融機構の形成過程ならびに朝鮮における貿易金融の展開過程を研究対象となし，具体的には第一銀行（東京），第十八銀行（長崎），第五十八銀行（大阪）の朝鮮金融市場における諸活動に焦点を置き，多くの史料を駆使して植民地金融史の実証的研究に大きな成果をあげている。高嶋氏はこれらの分析を通じて朝鮮金融市場の植民地化の過程を明らかにし，従来比較的未開拓の分野であった朝鮮経済史の研究に新平面を切りひらいた。この研究業績は経済学博士の学位に十分値するものと判定する。